

講義・演習等に関する大学生のニーズ

梶 田 勲 一（高等教育教授システム開発センター）

【調査の概要】

既報のように（注）、1995年の2月から3月にかけて、京都大学、大阪大学、大阪外国語大学の学生を対象に、自分たちの受けている講義等についての意識調査を行った。この調査には学部学生だけでも合計658人に協力いただいた。

本稿では、この調査の回答に基づいて、学生たちの講義・演習等に対するニーズの概要と、男女別・学年段階別の回答分布を報告する。調査項目のうち、関係のある部分は以下の通りである。

1. あなたがこの大学で受けた講義・演習・実験実習等についてうかがいます。

- <1-1> この大学であなたが受けた講義や演習等の中で、あなたにとって一番あなたのためになったと思うものは何でしたか？
- <1-2> それはどのような意味であなた自身のためになったと考えていますか？
- <1-3> その講義や演習等の時間、指導や学習の仕方などに何か特徴がありましたか？ それは具体的にどんなことですか？
- <1-4> その他にあなた自身のためになったと思う講義や演習等は何でしたか？
- <1-5> それはどのような意味であなた自身のためになったと考えていますか？
- <1-6> その講義や演習等の時間、指導や学習の仕方などに何か特徴がありましたか？ それは具体的にどんなことですか？
- <1-7> あなたはこの大学での講義や演習等の内容がよく理解できますか？
[よく理解できる、大体は理解できる、時々理解が困難、多くは理解が困難]
- <1-8> あなたがこの大学の講義や演習等を経験して、大学での教育や指導は今後このようなものであってほしい、と思う希望なり注文なりがあれば書いてください。

【講義等に対する学生の基本ニーズのリスト】

こうした諸項目に対して学生達が自由記述の形で回答してくれた内容を検討してみる。ただし余りにも個別的で具体的過ぎると思われるものは、ここでは取り上げていない。なお、数値的な分布を見る表においては、ごく少数の回答しなかった類型は省略されている。

まず、自由記述の内容分析の結果、最終的にまとめられた「講義等に対する学生の基本ニーズ」のリストを、表1として掲げておくことにしたい。

表1 大学での講義・演習等に対する学生の基本ニーズ

- 1.0 学生達自身にとって有効・適切な講義等を
 - 1.1 自分の興味や知的欲求に合うものを
 - 1.2 自分の将来に役立つものを
 - 1.3 これまでの自分の振り返りができるものを
 - 1.4 自分の实际生活に役立つものを
- 2.0 学問・研究の世界に目覚めることができる講義等を
 - 2.1 新たな知的世界に意識が広がるものを
 - 2.2 新たに何かを考えるきっかけになるものを
 - 2.3 自分自身が新たな知的能力を獲得できるものを
 - 2.4 学問的研究の世界に目が開かれるものを
- 3.0 熱意・人柄などが良い教官の講義等を
 - 3.1 熱意が伝わってくるものを
 - 3.2 学問・人柄に惹かれるものを
 - 3.3 語り口、話術の優れたものを
 - 3.4 個人的な魅力のある教官を
- 4.0 学生の自主性・参画意識が満足される講義等を
 - 4.1 少人数できめ細かな指導のあるものを
 - 4.2 話し合いを大事にしたものを
 - 4.3 班学習の形を取るものを
 - 4.4 レポートにまとめることを大事にするものを
- 5.0 よく工夫され準備された講義等を
 - 5.1 よく計画され準備されたものを
 - 5.2 講義等の際の手段・方法の良いものを
- 9.0 教官に対して一層の反省・自覚を求めたい
 - 9.1 教育者としての自覚を持ってほしい
 - 9.2 もう少し工夫して講義等をしてほしい
 - 9.3 学生を見下すような態度はやめてほしい
 - 9.4 日常的な態度を反省してほしい
 - 9.5 学生ともっと親密につきあってほしい

【基本ニーズごとの回答分布と男女差】

表1のリストに基づき、それぞれのニーズに関わる回答の分布を検討してみる。
 まず表2に基づいて、男女別に見た場合の分布を見ながら全体の傾向を概観する。

表2 講義・演習等へのニーズ / 男女別分布

	有効回答数→	男子 (150)	女子 (397)
【どのような意味で講義・演習等が自分のためになったか】(<1-2> <1-5>)			
1.0 学生達自身にとって有効・適切な講義等			
1.1 自分の興味や知的欲求に合うもの		27.3%	30.7%
1.2 自分の将来に役立つもの		24.7%	14.1%
1.3 これまでの自分の振り返りができるもの		14.7%	14.6%
1.4 自分の実際生活に役立つもの		28.7%	30.0%
2.0 学問・研究の世界に目覚めることができる講義等			
2.1 新たな知的世界に意識が広がるもの		37.3%	49.1%
2.2 新たに何かを考えるきっかけになるもの		6.0%	10.8%
2.3 自分自身が新たな知的能力を獲得できるもの		2.0%	4.5%
3.0 熱意・人柄などが良い教官の講義等			
3.1 熱意が伝わってくるもの		8.0%	5.3%
3.3 語り口、話術の優れたもの		7.3%	9.3%
【自分のためになった講義・演習等の指導や学習の特徴は】(<1-3> <1-6>)			
4.0 学生の自主性・参画意識が満足される講義等			
4.1 少人数できめ細かな指導のあるもの		9.3%	7.8%
4.2 話し合いを大事にしたもの		11.3%	9.8%
4.4 レポートにまとめることを大事にするもの		2.7%	6.3%
5.0 よく工夫され準備された講義等			
5.1 よく計画され準備されたもの		7.3%	5.5%
5.2 講義等の際の手段・方法の良いもの		22.0%	23.7%
【講義・演習等は今後こういうものであってほしい】(<1-8>)			
9.0 教官に対して一層の反省・自覚を求めたい			
9.1 教育者としての自覚を持ってほしい		19.5%	11.9%
9.2 もう少し工夫して講義等をしてほしい		28.8%	38.8%

男女ともに「2.1 新たな知的世界に意識が広がるもの」を重視する回答が、一番多く見られる。現代の大学生も基本的には非常にまじめで、講義・演習等に対して真っ当な要求を持っていることを、関係者が再認識する必要があるであろう。もちろん、これと並んで「1.4 自分の実際生活に役立つもの」「1.1 自分の興味や知的欲求に合うもの」を強く求めている、という点では、旧来の「学問の府」としての大学像からの乖離も見られないではない。今後の大学カリキュラム編成について念頭に置くべき点であろう。

また「9.2 もう少し工夫して講義等をしてほしい」という要求が強いこと、「自分のためになる」講義等の理由として「5.2 手段・方法が良い」ことを挙げるものが多いこと、にも注目すべきであろう。これは「教授が自分のノートを読み上げ、学生はそれを筆記する」といった講義形式に代表される古来の大学教授法からの抜本的な脱皮が、情報化時代と呼ばれる現代社会においては強く要請されざるをえない、ということを示すものではないだろうか。

次に、男女によって回答に顕著な違いが見られる点について見ておくことにしよう。「1.2 自分の将来に役立つ」講義等に高い評価を与えるものが男子に多く、「2.1 新たな知的世界に意識が広がる」講義等に、さらには「2.2 新たに何かを考えるきっかけになる」講義等に高い評価を与えるものが女子に多い。このことは、大学教育を受けるといふことの意味付けが、男女雇用機会均等法が実施された今日においてさえ男女で微妙に異なっているのではないか、

ということをうかがわせるものである。また教官に対して反省を求める点について、「9.1 教育者としての自覚」という基本姿勢に関わる要求が男子に多く、「9.2 講義等に工夫を」という具体的水準での要求が女子に多いことも興味深い。

【学年段階による相違】

次に表3によって、学年段階によるニーズの違いを見ておくことにしたい。ここでまず大きく目を引くのは、「1.4 自分の実際生活に役立つ」講義等を求めるものが、3年生以上の場合に大きく減少する、という点である。専門科目が多くなり自分の専攻領域に深く入り込んでいくにしたがって、「2.1 新たな知的世界に意識が広がる」「2.2 新たな何かを考えるきっかけになる」というものが、より一層求められるようになる、ということであろう。この点を見るならば、現代の大学も、さまざまな批判があるとはいえ、曲がりなりにも「学問の府」としての機能を果たしている、ということになるのであろうか。

また3年生以上になると、「4.2 話し合いを大事にしたもの」「4.1 少人数できめ細かな指導のあるもの」「4.4 レポートにまとめることを大事にするもの」が、「自分のためになったもの」として高く評価されている。学生の学習態度が学年が進むにつれて自主性主体性を増していることなのであろう。喜ばしい傾向である。

表3 講義・演習等に関する要求 / 学年段階別の分布

有効回答数→ 1年/305, 2年/173, 3年以上/67			
【どのような意味で講義・演習等が自分のためになったか】(<1-2><1-5>)			
1.0 学生達自身にとって有効・適切な講義等			
1.1 自分の興味や知的欲求に合うもの	27.2%	32.9%	32.8%
1.2 自分の将来に役立つもの	18.4%	15.0%	16.4%
1.3 これまでの自分の振り返りができるもの	14.1%	15.6%	14.9%
1.4 自分の実際生活に役立つもの	33.4%	31.8%	7.5%
2.0 学問・研究の世界に目覚めることができる講義等			
2.1 新たな知的世界に意識が広がるもの	45.2%	42.8%	58.2%
2.2 新たに何かを考えるきっかけになるもの	7.9%	9.2%	17.9%
2.3 自分自身が新たな知的能力を獲得できるもの	3.3%	4.0%	6.0%
3.0 熱意・人柄などが良い教官の講義等			
3.1 熱意が伝わってくるもの	5.2%	4.6%	13.4%
3.3 語り口、話術の優れたもの	7.9%	8.7%	11.9%
【自分のためになった講義・演習等の指導や学習の特徴は】(<1-3><1-6>)			
4.0 学生の自主性・参画意識が満足される講義等			
4.1 少人数できめ細かな指導のあるもの	5.6%	8.1%	20.9%
4.2 話し合いを大事にしたもの	6.9%	5.2%	38.8%
4.4 レポートにまとめることを大事にするもの	3.3%	5.8%	13.4%
5.0 よく工夫され準備された講義等			
5.1 よく計画され準備されたもの	6.9%	4.0%	7.5%
5.2 講義等の際の手段・方法の良いもの	21.0%	22.0%	35.8%
【講義・演習等は今後こういうものであってほしい】(<1-8>)			
9.0 教官に対して一層の反省・自覚を求めたい			
9.1 教育者としての自覚を持ってほしい	12.1%	15.1%	17.5%
9.2 もう少し工夫して講義等をしてほしい	35.8%	35.3%	38.6%

【おわりに】

この調査研究は、基本的には今後の大規模な研究を実施する上での予備調査的色彩を帯びたものであった。したがって大学や専門領域ごとの被調査人数にも大きな偏りがある。各大学の学風や専門領域等による学生のニーズの相違（回答分布のあり方）も当然ながら予想されるところである。しかしながら、本調査で明からされた「講義等に対する学生の基本ニーズ」そのものは、かなり網羅性の高い妥当なものと思われる。今後の調査研究を積み重ねていく上で、ここで明らかにされた学生の基本ニーズのリストは、概念枠組みを準備する上での叩き台として十分な基盤を提供するものではないだろうか。

（注）

梶田勲一「大学生は講義・演習等の何に満足し、何に不満なのか」京都大学高等教育研究, 第1号, 54～58, 1995年6月。